

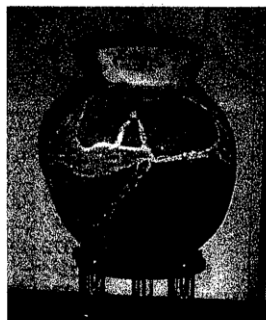
今昔物語 第43話 蓋ふた

蓋は器物の口を覆うもので、覆われる方を身、あるいは器といいますが。普通の蓋は身に比べて小さいですが、戦国時代の球形敷のようまがたまに蓋を身と同じ大きさに作り、一對の器物として使用している場合もあります。甕かめなどの既存の容器を組み合わせた場合は、蓋の方が大きいものもあります。

「おとしぶた」(落蓋)といいますが。普通の「かぶせぶた」は、少なくとも蓋の厚さだけ身よりも寸法が大きくなります。これを身と同じにそろえる方法として、身の口縁の外周に段を付け、蓋受けの立ち上あがりがりを内側に作ったものを印籠いんろう蓋といいますが。この立ち上あがりがりを蓋の方に付けたものが逆印籠さかいはらです。須恵器の蓋杯にもこの種の立ち上あがりがりはありますが、蓋としては「かぶせぶた」ではと言われています。

蓋をかぶせ方によって分類すると、身の口縁が蓋の中に入るものを「かぶせぶた」(覆蓋)、身の口の上うへにのる蓋を「おきぶた」(置蓋)、身の口内に入り込む蓋を

今昔物語 第44話 土師器はじき



古墳時代から奈良、平安時代まで、長く製作され続けた赤色の素焼きの土器の総称です。系統的には弥生式土器の後身でもあり、今の「かわらけ」の前身に当たりまます。土師器という名は『延喜式』によるものですが、『日本書紀』

雄略天皇17年の条に、宮廷の食器を作る部民を土師部と呼んだことがみられますので、この土師器の名称の始まりは古いものです。しかし、考古学上の用語としては、古墳時代以降の土器を土師器としています。弥生時代の弥生式土器と区別する説が有力になったのは、比較的新しいことです。

土師器は弥生式土器と同じように「ろくろ」を使用せず、巻きあげなどの原始的な方法で作られています。焼成にも大規模な窯は使用していません。焼成温度も弥生式土器と同じく850℃前後です。